

3.11 大震災 焦点

岩手・洋野町 犠牲者ゼロ

青森県境にある岩手県洋野町は、東日本大震災の被害が大きかった岩手、宮城、福島3県の沿岸自治体で唯一、死者・行方不明者がゼロだった。南北に長い人口1万9000人の町。「とにかく逃げろ」。過去の津波被害の教訓から、その意識の高い町民が多かったという。他の自治体では避難誘導などで犠牲者が出た消防団も、任務終了後は逃げることを徹底した。犠牲者ゼロの陰には、町を挙げたここ数年の取り組みがあった。（亀山貴裕）

「まず逃げて」訓練奏功



高台から八木地区を見下ろす佐々木さん（右）ら消防団員。海拔20メートルの高台からは八木港が一望できる＝岩手県洋野町

「任務後退避」消防団も徹底

洋野町役場に勤める佐々木安武さん（52）は3月11日、庁舎で激震に見舞われた。「尋常ではない。即刻、所属する地元消防団の詰め所がある八木地区（約260世帯）に車を走らせた。

役場から約8分離れた詰め所には数分で到着。同地区は数々の津波被害に遭ってきたにもかかわらず、町内で唯一、防潮堤が整備されていない。「すぐ高台に避難してください」。消防車両に乗り込んだ佐々木さんは、拡声器で呼び掛けた。約10分後、事前に取り決めていた高台に退避。住民が低地に降りないよう、町道を封鎖した。全て訓練通りだ。

他の地区の消防団員も、分担で決まっている水門全部を12分以内で閉鎖し、すくさま避難した。



八木地区を担う消防団第2分団第3部長の久保利美さん（59）が説明する。「消防団も任務を終えたら退避を徹底する。そう決めていた。津波には誰だって勝てない。死んでしまえば、その後の活動もできなくなる」。

■意識変える
同町では明治三陸津波を見直してきた。

波（1896年）で254人、昭和三陸津波（1933年）で107人が死に。その多くは八木地区の住民が占めた。今回も、八木地区を含めて住宅55棟、漁業施設などの非住宅125棟に津波被害が出た。漁船に至っては7割近くを失った。

■防災組織も
訓練で「逃げる」ことを徹底してきたのに加え、08年以降、各地で設立された自主防災組織の活動が、住民意識を高めたという。

住民アンケートを行ない、訓練を日曜日の日中に変更。07年には消防団員の退避行動、08年には低地に続く町道の道路閉鎖が、訓練のメニューに加わった。

八木北地区の自主防災組織は、高台に上る路の除草や整備をしてきた。避難路の掃除は、逃げる道筋を頭に焼き付けるのに役立った。過去の津波の経験者から、話を聞く場も設けた。

幹事の蔵義治さん（68）は「かつて津波で多くの犠牲者を出した八木地区では、逃げるが勝ち」という意識が強い。自主防には全戸が加入し、顔が見える関係を構築したことが、今回の避難で生かされた」と話す。

年賀状印刷
一年ぶりのご挨拶
日章堂
275-1052